

武術伝授について：カセム・ズガリさんとの対話から

昭和五十年入学 稲賀 繁美

カセム・ズガリ氏はフランス国立東洋言語文化大学の研究員であり、今年度、当方の奉職先の国際日本文化研究センターの客員外国人研究員を務めている。名前からわかるのとおりご家族はアルジェリアのご出身。アルベール・カミユの『異邦人』の舞台となった町、オランといえば、実存主義世代のかたには、ユの『異邦人』の舞台となった町、オランといえば、実存主義世代のかたには、想像もつくであろうか。戸隠流の忍術の免許皆伝のほか、剣術、槍術、棒術の

ほかフェンシングの歴史と実践についても熟達しておられる。伝書を広く渉獵しておられるが、それは日本の多くの家元の宗主と信頼関係を結べばこそその賜物。江戸の古文書についての高度の読解力も持ち合わせるが、身体技法としての古流には、世界の他の土地ではすでに消滅してしまった知恵が宿っており、それゆえに日本武術の修行に励むという本格派である。と同時に世界各国の特殊部隊の訓練にも従事しておられ、表向き華々しい競技格闘技の限界も、しっかりと見定めておられる。氏の講演や会話からいくつかの教訓を拾って部分的に復元し、いささか注釈を加えてみたい。なお私見たち交じりは寛恕されたい。

◆ 伝書とは何か

日本の武術の伝書をみても秘術はわからない。肝心なところには「ここに口伝あり」とされ、その授受は師弟間の直接の体伝・直伝に委ねられるからだ。それは意図的に何かを隠匿して秘密めかすというわけではない。書や絵、文字では伝達不可能なものがそこにあることを指し示すにすぎない。西洋ではデカルト以降、そうした心身技法の伝達を合理的に分析する傾向が亢進した。そこには利点もあるが、逆にマニユエルに乗らない部分が消去され、あたかも存在しないものであるかの如く忘却された。忘れてならないのは、デカルト本人は、スペインの師匠に刀剣術を学んだ、高度な剣術遣いだったことだ。デカルト的方法として確立された合理主義は、むしろデカルト本人が伝えようとして伝え得なかった次元がどこにあるかを指し示す「欠如」として理解されるべきだろう。デカルトはカルテジアンではなかったのである。そこに西洋近代の合理主義の限界を見定める必要がある。

◆ 口伝はわからない。それを理解するには歳月が必要。

お師匠の口伝えの意味は、弟子にはその時点ではわかるはずが無い。師匠の年齢になり、師匠がもはや存在しなくなつて、はじめてそれと悟られる折節も訪れる。師匠にとつても口伝を伝えるべき弟子を見定める経験は、一期一会で

あり、それは師匠にとつても未知の体験であり、それがどのような結果を招くかは、その時点では判らない。口伝を重ねる体験の末、晩年に至つてはじめて、ある程度の統計的予見が働くようにはなる。だが師匠本人も加齢を遂げているから、老境での経験は、見た目には類似していても、もはや壮年のときの反復ではありえない。同年齢の弟子との間の年齢差は年月とともに拡大するから、同一の口伝伝授を反復するという経験は、師匠にとつても、二度と繰り返しはありえない。

◆伝授には限りはなく、終わりもない。

したがって、ある時点で免許皆伝などという儀礼がなされるが、実際にはある時点で伝授が完結することはありえない。伝授されたことを加齢のなかで反芻することで、初めてその意味は納得されるものと、いわば孵化してゆく。それもあくまで、少しずつ。だからこの孵化もまた、無限に更新される性質を帯びている。あらたな孵化が見られなくなったならば、それは自分の修行が停滞していることの証拠ではないだろう。心身の能力が加齢によつて衰退し始めて、はじめて見えてくる次元もある。逆にいえば肉体的な盛りにあつては、身体の自在さゆえに隠される側面、理解できない盲点が必ず潜在する。学統・流儀には日本語では「流」の字が充てられるが、それは伝授が「流れ」をなすからだろう。

◆師を超えるということ

たしかに守破離という言葉はあるが、以上を踏まえると、師を超えることはできない、という解釈も納得されよう。勝負事で師を圧倒したからといって、それで師を超えたとは言い切れないからである。スポーツ競技の場合には、チャンピオンといえども、ある年齢で引退し、コーチといった役割に転ずることが一般だろう。だが武術の伝授の場合には、弟子には先行する師のある時点での技量をその時点では体得できない。その意味において、師は永遠に陵駕できな

い存在として残る。それは師匠が老齢により稽古に立てなくなつたとしても、変わらない。伝授されるべきものを受け取り損なうという限りにおいて、弟子の劣位はついに解消されないまま残るからである。そうした時間軸の推移を無視して、例えば双葉山と大鵬が全盛期に対決したらどちらが勝つたか、といった議論がなされる。だがこれは虚構であるという以上に、心身技法の伝授には避けがたい時差という初期条件を捨象した謬見に過ぎまい。全盛期の大鵬は、決して全盛期の双葉山に対峙しえない。この冷徹たる歴史の真実があればこそ、喪失と裏腹の伝授には命を懸けるだけの価値が宿る。

◆ 武術の心得としての「殺意を殺すこと」

特殊部隊などの隊員に訓練を施す場合に、一番に強調し、執拗に修練することは、いかに殺意を見せないかの心得となる。ハリウッド映画の主人公のような振る舞いに及べば、戦場や戦闘の場面では格好の標的となるだけのこと。武器を見せ付けたり、武術を磨いているような素振りを誇るのは愚の骨頂。抜刀の稽古の意味も、いつ抜くかを見せないことに行き着く。きわめて初歩的には、抜くと判るような素振りを見せるのでは、抜刀の意味がない。そこから技の工夫が始まる。相手の攻撃を未然に抑止するためには、自らの殺意を殺して抹消することが提要となる。殺すことが出来ればこそ、相手を生かすことができる。だからこそ、こうした教訓は、敵から教わることだ。辛いことからこそ多くを学べる。相手より優位にあり、より戦力に優れていること誇示する愚は、強大な敵からこそ学びうる。

◆ 体育でということ

体育という言葉は嘉納治五郎先生の編み出した言葉といわれる。だが現在の柔道は、嘉納先生の「体育」の意味をすでに忘れている。嘉納治五郎は起倒流をはじめとする柔術を学んだが、いずれもその師を早くに無くしている。そのため近代柔道には師弟関係による技の伝授という次元への配慮が薄弱なまま